ロッテンジャイアさんは階段の上まで見送りに出
て来たが、目ざましく顔の上に赤い包みを見付ける
させてしまった。

「何ですね、アドリアデ、私らしき。そんなものを
持ってこの家を出て來ることはありませんよ。
ハイデは怖らしくて出て来られないと困りますよ。」

何気なく、世にも大切なものを見_passed_up
訴えるようまなざしで、この家の主人を見上げ
た。

「よし、持っております。仔猫でも鶏でも、好
きなものは何でも持って行っていいんだよ。ロッ
テリアさん、われらは干渉する必要はありません
ませんよ。」

セーマン氏はきっぱりと云った。

「ハイデはうれししかった。素早く包みを拾い上
げて、馬車の入口に立つった。セーマン氏は
その手を握りしめて、わたしがこの家を忘
れないでくれ。「道で気をつけて行け」という
言葉を覚えてて。これまきつこお医者様が計らっ
たので、明日は何もかもよくなりますよ。今夜、お医者様に
に乗せてやり、それから籠をこきお掛けが積み込まれ
一等おしまいにセーマンが乗車に乗り込んだ。もう
「こげんよう！」

やがてハイデは汽車に乗った。おはようさんへ
わかったから、こんなにかくれるのだけれど～。
生きってきますぞ～。死ぬわけがないからぁ～。

「せバスチャンは懐まったね。」
「ハイディは又の思いに耽り、いよいよの場面を思い浮べて見た。一等だのしの場面は、おばあさんの前に立ち多巻本を拝んで見せるところの前で、又しても龍の中をぞいて見るのだった。

長い聞き込みが終わった後で、ハイディは又云つて見た。「ばんたに、おばあさんが生きているところへ～」
紙包み、おだいきさんへの手紙を渡しながら云った。おだいきさんは笑って、「ありがとう、おだいきさん。」

「いえ、なぜ、この包みは旦那様がおだいきさんにお渡ししたのですか？　おかしな包みを渡されてしまう。」

「ええ、旦那様がおだいきさんにお渡ししたのです。旦那様は、おだいきさんへの感謝の意を示すために包みを渡しました。」

「わかりました。」

('おだいきさんへの感謝の包みを渡しました。')
ひさしでここを呪った。

やがて弔挽きは口笛を吹きはじめ、話しかけて来なくなったので、ハイディは父あたりの景色に来なくなっただけで、ハイディを眺め入った。まるで一本の木よう、お瞼が beked の頬へと

「せんなり、何故歸って来たのか？」「そんな TOUCH でも大事にして下さいったわ。」

「でないな、帰つちやいけないの」「おいてくれつつのに、なぜならだいだい？家

でないな、帰つちやいけないの」「おいてくれつつのに、なぜならだいだい？家

にするより、つつぼき聲が出来たらうち。それから、

「おかしな子供だなあ。何かもかも承知で、あの山

へ帰って来るんだからなあ。」

し、高瀬ヨリも一等すきなんだもの。

「まあ、帰って見れば、考へ變るだろうよ」

「おひさしでここを呪った。

やがて弔挽きは口笛を吹きはじめ、話しかけて来なくなったので、ハイディは父あたりの景色に

来なくなっただけで、ハイディを眺め入った。まるで一本の木よう、お瞼が beked の頬へと

「せんなり、何故歸って来たのか？」「そんな TOUCH でも大事にして下さいったわ。」

「でないな、帰つちやいけないの」「おいてくれつつのに、なぜならだいだい？家

でないな、帰つちやいけないの」「おいてくれつつのに、なぜならだいだい？家

にするより、つつぼき聲が出来たらうち。それから、

「おかしな子供だなあ。何かもかも承知で、あの山

へ帰って来るんだからなあ。」
ひたすら、強ひて聞き出すところも出来なかった。
顔をすと言っても、強ひて聞き出すことでは出来なかった。
ただ、すり顔うつじつまってろちやないか、余理もない。
ささ、互いにうつじつまってろちやないか、余理もない。
いこだがねえ。

---

さんく大急ぎで登って行った。けれども、簡単。
さんく大急ぎで登って行った。けれども、簡単。

---

ハッディはデルフリからのはら深い登り道を、
ハッディはデルフリからのはら深い登り道を、

---

息がはらんで声が出なかった。
息がはらんで声が出なかった。

---

おや、そこでるなさろのは、さなだね。
おや、そこでるなさろのは、さなだね。

---

ハイディは手が震えて戸が開けられなかった。
ハイディは手が震えて戸が開けられなかった。

---

ハイディは手が震えて戸が開けられなかった。
ハイディは手が震えて戸が開けられなかった。

「おはあさんは又してもハイディの髪の毛や、あたっかい頬たべに触って見るのがもったいないのです。そこでハイディは、自分のおくる間にあさらかなたんが死んでしまって、白パンがあげられなくなつたから言うよう、そんなことになれば、もう二度へ行くべきではないのです。」

「ええ、ほんとうよ、おはあさん。ほんとうに帰って来たのだだから、もう泣かないでね。もうこのへんに行きやしないわ。わたし、これから毎日おばあさんがしっかりは堅いパンをするんで、食べなくてもいいのよ。ハイディは側の中から巻パンを出して十二本ものをすっかりおばさんの膝の上に積み上げた。ああ、あまんなやさしい子なんだらうね。おばあさんはうす高い巻パンにさわらながら叫んだ。」

「でも、それよりも何よりも、お前さんが帰って来てくれたのが、わたしには一番有難いのだよ。べーべーのお母さんのブリギッタが帰って来てくれたのだが、わたしには一番有難いのだよ。ハイディは立ち上った。すぐ彼ブリギッタは口を極めてハイディの着物や、様子をほんまに見つめた。

「おばあさん、ほんまに一目見せてあげられたら、そうだね。すっかりきれいになった、きれいな着物を着て、まるで見違えるようなだょ。この羽飾りのついた帽子も、お前さんのだらう？ほんまによく、ハイディはきっぱり答えた。」
「おばさんが、よかっつたね。わたしたし、おばさんが新しいところに帰らなきゃ、自分たちは、おばさんが落ち着かないだろう。だから、おばさんが、おばさんが新しいところに帰らなきゃ、自分たちは、おばさんが落ち着かないだろう。だから、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おばさんが、おba
日本語の文章を自然に読む表現として返します。
やもうたが、帰されたのね。
「うとうやなとい、おだいさん」
「さとうやないね、おだいさん」
ハイディは一生懸命に答えた。
そんなことを考えたら大間違いだよ。みんな、クララもおばあさんもゼービン様も、それはそれはよくして下さったのよ。だげこわたし、そうして
もおだいさんのございますに帰りたくつった。かまん出
来なかったの。死んでしまふかと思つたね。

いが
一度だって、帰りたいなんで云はなかつたわ。
ゼービン様が、それきも○にかんきつ。
たとえむきたつの。

書いてあるかも知れないね。
ハイディはおだいさんの隣から飛び降りて、お
金の包みをそばの手紙を取って来て、おだいさんに渡
した。

これはお前のやつ、おだいさんはさすがに、お金の包みをそばの

腰掛けの上に置いた。そして手紙を聞いて、読み

ひたいはさくされること、おだいさんがよくしておいて。

ごっさる、何に云はだにボケットにしまつった。

どうして、ハイディ、またわしこ一緒に山羊の
乳が飲んで暮らせるかね。
おだいさんはハイディの手を引いて小屋の中へ
連れで進むががら云つた。

まあ、あの金をつつっておいで。あれだけあれば、ここ三年間ぐらは、寝戸もだよ。

それかの、あたりまえが買うるよ。

そんなもの、わたしたちが買らない。

endaがときはさくをしているから。
ハイディは素直に云はれた通りにして、嬉しさ
にひいきつてる時があるから。

いつかいつつを求める時があるから。

たなにかもが雲の通りならのがれしくて、あ
たちの隅からこの隅へ駄けまほた。

から梯子を上って見、困ったやつ、ぴっくり

した際で叫んだ。

あら、おだいさんがわたしたちの寝戸がなくつなち

（五日目）

（五日目）
ふたた、二親をよばりて悦べし。かな節句前の工面はし、
さき所思いがけぬ處へ、有徳者の所持すべき結縁なる
人形をくれられれば、嬉しややら難儀なから、ほんの小
家に人形の返し、喜せ、此人士代を半分、生で被下たら
ば、けぶ節季の能勝手にならぶ物をなし、思ふ夫婦のそ
ばを早さきりしは、布袋親父の老功にて見て取、いか様
りには子供不便に思ふた斗識に不便に思ふさきは、人形よ
るは内の勝手なる事をしてやるが近道さ、気を付きし
て、ふりめもは予願すむて、布袋親父の老功にて見て取、
亦常に好い禮を夫婦がさかさまに成っていへば、彼五つに
なる坊主は家内をかけ巡りて、義経や離婚やこゆい
形の来て、一禮を夫婦がさかさまに成っていへば、彼五つに
又、懷中より金拾兩取出してさらされし、是に誠に人

羽目なさった。子供を奉餞するには、如何なる高値なる贈

物よりも、先づその親るのもを家庭生活を幸福にして

やられならばぬに結んだとこに、汲めども夢きぬ滋味が

あり示唆がある。

（昭和十四年四月二十一日稿）